

中国語辞典における語素のあつかいについて

荒川 清秀

Abstract

In the Dictionary of Yuanren Zhao and Liansheng Yang, morphemes (Chinese characters) are classified into three categories of usage: bound, free and literary. However, most characters are difficult to categorize, because they have meanings and some characters which cannot function independently as words can still function independently in certain set phrases and idioms. The author recognizes that these characters, which are used in certain set phrases and idioms, are to be treated the same as the morphemes which are used in compound words. The author also recognizes that the morphemes which are used in ancient writing and those used in modern written language are to be separated.

0 はじめに

かつて、と言っても、1980年代まで中国で出た中国語の辞典において、品詞標示をしたものは皆無であった。これに対し、日本では、
太田辰夫・香坂順一『現代中日辞典』光生館 1961年
倉石武四郎『岩波中国語辞典』岩波書店 1963年
が1960年代にすでに品詞を標示していた¹⁾。

それが最近では、日本はもちろんのこと、中国でも辞書に品詞をのせるのが当たり前になってきた。日本で出版されたものをあげれば、
光生館『現代中国語辞典』1982年
は上の『現代中日辞典』を受けたもので、品詞標示はもちろん継承された。さらに、1990年代後半から2000年代には以下の辞書が、品詞標示を一つの特色として、つぎつぎと出版された²⁾。

小学館『中日辞典』初版1992年 再版2002年

講談社『中日辞典』初版1998 再版2002年

三省堂『クラウン中日辞典』2001年

白水社『中日辞典』2002年

一方、中国でも、つとに、

『簡明漢英詞典』商務印書館 1982年

が品詞を標示していたが、これはこの辞書が外国人を対象にしてつくられたからである。そして、中国でも1990年代にはいと、品詞標示をする辞書がふえてきた。目に入ったものでは、以下のものがある。

『現代漢語用法辞典』江蘇少年儿童出版社 1994年

『現代漢語学習詞典』上海外語教育出版社 1995年

『漢英双解詞典』北京語言文化大学出版社 1997年

『応用漢語詞典』商務印書館 2000年

『現代漢語語法辞典』延辺人民出版社 2001年

かつての中国語辞典の世界を考えると隔世の感がある。ただ、中国でもっとも権威ある『現代漢語詞典』の増補版が2002年に出たが、これが依然として品詞標示をしていないのは、ある意味で慎重さを示しているのであろう。側聞するところでは、現在その作業をすすめているようである。

1 Free と Bound

形態変化の乏しい中国語では、品詞は他の語とのくっつき、文中での役割にもとづいて決められるが、これは言い換えれば、品詞は語として認定されてはじめて問題にできるということである。

中国語において漢字（厳密には漢字で表記される言語単位であるが、以下便宜上この表現を使う）は最小の意味単位（morpheme = 形態素）であり、現在中国の言語学界ではこれを“語素”という名で呼んでいる。漢字=“語素”は古代中国語においては、それがそのまま語であることが多かったが、現代中国語においては、語の構成要素にしなければならないものも少なくない。たとえば、“敵”“服”などは、日本の漢語の中では語としてふるまっているが、中国語ではともに“語素”でしかなく、それぞれ語として使用するには、“敵人”“衣服”と2音節にして言わなければならない。言い換えれば、現代中国語においては、字は最小の意味単位ではあっても一したがつて、漢字が「表語文字」であるというのは形態素を表すという意味においては正しい—イコール語ではなくなってきているのである。しかし、漢字が形態素文字であるという特徴によって、古文を読み書く中国知識人の頭の中においては、字と語の分離はなかなか容易ではなかった。この中国知識人にとって至難のわざであった、字と語

の分離を最初にはっきりと打ち出したのは、おそらく、

趙元任・楊聯陞1947『国語字典』

CONCISE DICTIONARY of SPOKEN CHINESE (以下『字典』と)

であろう。

『字典』では、字がそのまま語になるものを F (free word), 語の構成要素にしかならないものを B (bound word) と分けたほか、L (literally style) というものを設けた。もちろん、F はときに他の形態素と結合して複合語をつることがある。『字典』では、これをつぎのように言う。

B means always bound, but F means sometimes free. (XXVii)

ここで言う F と B は、構造言語学の用語で、文中で独立して使うことのできるものを Free そうでないものを Bound と呼ぶ。これは中国の言語学界でいう単語の定義より厳しいものである。いま、“使”を例にとってみよう。

使 F to use ; B envoy 大使

この、「使う」という意味の時は Free だが、“大使”の“使”は Bound だというのは理解がしやすい。これに対し、“再”や“从”は単独では使えないから、『字典』では、B となるが、
欢迎/你/再/来。

你/从/哪儿/来？

のような文から、独立して使える自由な単位である“欢迎”“你”“来”，“你”“哪儿”“来”を取り去ったとき、最後に残るものである。これらは単独では使えないが、ある語の一部として使われているわけでもなく、文中では自由に働いていると言える。そこで、現代中国語の文法では、“再”や“从”のようなものも語として認定する。要するに、以下にあげる虚詞の類は、『字典』では B に分類されているが、現代中国語の文法では語と認められているというわけである。

介詞 从 把 离

副詞 再 又 就

語気助詞 吧 呢 吗

したがって、『字典』の B を見る場合には以上の点に注意する必要がある。

ところで、『字典』で興味深いのは“不”で、

不 B not, un- ; F no, not so.

とあって、B と F がともにあるが、これは、形容詞、動詞の否定に使われる—英語でいえば not にあたる—“不”は B だが、単独で使われる—英語でいえば、no にあたる—“不”は F であると考えからである。ただし、現代中国語の文法では両者はともに語と認定される。

2 Literally style の中味

ところで、中国語の語素を分類していくと、FやBという分類だけでは、どちらにも入れがたいものが出てくることに気づく。『字典』がLを設けたのは、このFとBのあいだの隙間を埋めるためであったと考えられる。しかし、その中身を検討してみると、

之乎者也于亦以何即尚斯曰

のような、純粋に文言的なものから、現代語としてはBとして造語成分になるようなものまで含まれている。たとえば、『字典』に、

从 B-from ; L to forrow

とある前半は前置詞としての「から」の用法であるが、後半は文言の「従う」意がLの判定となったものである。しかし、「従う」意の“从”も造語成分としては、

服从 盲从 任从 顺从 听从 随从 依从

のように、多くの複合語の中に使われている。この点から言えば、このLはBとすべきものである。また、

易 L change, mutation ; to interchange

についても、

交易 贸易 移风易俗

などが存在する。

さらに、

售 L to sell, retail

持 L to hold

寒 L cold ; in poor condition

なども、それぞれ、

售 售价 售卖 售货 售票 出售 代售 销售 配售

持 保持 扶持 坚持 维持 支持 主持 持续 持久

寒 寒冬 寒潮 寒假 寒冷 寒风 寒气 寒暑 寒流

のように、現代語で数多くの複合語をつくっている。したがって、これらを“之乎者也”なみにLに分類することは、現代中国語における語素内部の質の違いを見失うおそれがある。

3 字と語のあいだ (その1)

つまるところ、FとBとLだけでは、中国語の語素を分類するには不十分だということである。この問題に一つの方向を示したのは、呂淑湘1979で、呂は上のFやBのどちらにも入れがたいものとして、次のようなタイプをあげた (p. 18)。

- | | |
|---|-----------------|
| (1) ふつうは単独で用いることができないが、一定の形式の中(たとえば量詞等との結合)では可能なもの。 | 三号楼 院一级 |
| (2) 専門用語として用いられる場合 | 氧气/氧 叶子/叶 |
| (3) 成語や熟語の中で | 前怕狼后怕虎 你一言, 我一语 |
| (4) 文章語において | 云 时 |

北京語言学院から1982年に出た『簡明漢英詞典』(以下『簡明』と)は、中国で早くも品詞標示をした注目すべき辞書であるが、同時に呂淑湘1979の呼びかけを辞書において実践したものとみることできる。これからかなりおくれるが、

『現代漢語用法辞典』江蘇少年儿童出版社 1994年(以下『用法』と)

『現代漢語學習詞典』上海外語教育出版社 1995年(以下『學習』と)

も呂淑湘の路線に則って編まれたものである。

『簡明漢英詞典』は、字と語の間に位置するものを(いわば、先に『字典』でLになっていた部分を)〈書(面語)〉と◇に分けて標記し、後者につぎのような説明をあたえた³⁾。

本词典划词以现代汉语为标准。在现代汉语中不能独立作词运用的字，一律不注词性，不释义。有的虽不能自由运用，但在某些固定词组或习惯组合中仍有生命力，具有独立含义，本词典标注词性，释义，并加“◇”(说明p. 11)(本辞典における単語の認定は現代中国語を基準とする。現代中国語において独立して語として運用できない字は一律に品詞を標示しないし、意味を与えない。なかには、自由に運用できないが、ある固定連語、習慣的な組み合わせの中においては依然として生命力をもち、独立した意味をもっているものがある。本辞典はそれらに品詞を標示し、意味を与え、かつ“◇”を加える。)

つまり、固定フレーズと習慣的な組み合わせの中において、一見独立して、「語」のようにふるまっているものを字と語の間に位置づけようとしたのである。いわば「準単語」とでも呼ぶべきものである。

今、この◇の中身を先の呂淑湘1979の指摘とあわせ検討してみよう。

たとえば、呂淑湘1979の(1)であげる“楼”を『用法』『簡明』は語と認定している。これは、呂のあげる“三号楼”以外にも、

一幢楼，一座楼

のように、数量詞の修飾を受け、

一楼，二楼，三楼

のように数詞の修飾を直接受け、階数(棟数)の標示にも使えるし、場所詞と結んで、

楼里（建物の中）

のようにも言えるという事実をふまえているのであろう。たしかに、
一幢楼，一座楼

のような数量詞の修飾を受ける以上語であると認めざるをえない。ただし、上の数詞と直接結ぶ例は、量詞化、あるいは名量詞化したと考えないとおかしく、純粹に名詞の用法とは言えない。また、1音節の場所詞との結合は、“桌子”が“桌上”、“屋子”が“屋里”になっても、“桌”や“屋”が単独で使える証明にならないのと同じで、本来判定語としてはあまりふさわしいものではない。

一方、“院”の方に『簡明』は◇を付し、“我院～”という例をあげる。これは、“院”が“我”と結びついてはじめて独立して運用できる単位になるもので、その意味で語とは言いがたく、『簡明』が◇を付したのは適切な処置であった。これに対し『用法』は“院”を名詞としながらも、“院儿”“院子”の例をあげる。これは“院”が、“儿”“子”のような接辞がついてはじめて語になるということであるが、『用法』はそのもとのものも語と認定しているようである。両辞典で違いがあるわけだ。ほかにも、“孩子”“孩儿”の“孩”に『簡明』が品詞を標示せず（したがって単語と認定していない）、『用法』が名詞としているのは、“院”の場合と似ている。両者はともに語の判定をゆるやかに考えてはいるが、より厳格なのは『簡明』の方と言えるだろう⁴⁾

ただし、『簡明』では、つぎのような身体語彙の多くを語と認定している。なお、() に『用法』の判定を入れておいた。

耳→耳朵（『用法』語）
眼→眼睛（『用法』語）
眉→眉毛（『用法』〈書〉）
鼻◇→鼻子（『用法』語）
发→头发（『用法』語）

これらは、どれも現代口語では→の先のように、二音節にしないと語として運用できないものであるが、“鼻”を除き、『簡明』には、なんのマークもついていない。単語判定のゆるさはこんなところにも出ている。『用法』は、“眉毛”の“眉”にのみ〈書〉のマークをつけている。〈書〉についてはあとで述べる。

このように、中国の辞書が品詞を標示するようになったといっても、語の認定はかなり緩やかなものである。さらに、いくつか例をみてみよう。

一国两制

一国有—国的制度

の“国”を、『用法』『簡明』はともに語としてあつかっているが、上でもみたように、数詞は直接純粹の名詞を修飾できないし、ふつう、「国」というためには、

日本是一个独立的国家。

のように、“国家”としなければならない。したがって、“一国”の“国”を語ということはできない。これに対し、

你是哪国人？

の“国”は語であるが、この場合は名詞ではなく量詞である。

このように、『簡明』や『用法』の語の認定はかなりゆるやかなものである。それは、言い換えれば、中国の知識人の頭の中で字と語の分離が難しいことをものがたっている。

(2)の専門用語については、各専門分野で多くの「語」が存在するであろうが、ここではこれ以上述べる用意がない。

4 字と語のあいだ（その2）『簡明』の◇について

つぎに呂淑湘1979のいう(3)について検討してみよう。(3)とは、“前怕狼后怕虎”“你一言，我一语”のように、成語や熟語の中で独立した意味を維持するものであった。いま、たとえば、“安”を例にとると、『簡明』には、

安

- (动) (1) fix ; install ~电灯
 (2) force, upon. ~罪名
 (3) ◇ be satisfied ; ~于现状
 (4) ◇ safe ; 转危为~

とあって、(1)(2)は自由な単位、つまり語と認定すべきものであるが、(3)(4)は固定した組み合わせ、慣用句の中においてのみ、「語」のようにふるまうということである。こういうふうには、語の認定はその字が多義であるときには、ひとつひとつの意味についてみなくてはならない。ちなみに『字典』では、

安 B peaceful 平安 ; F to install, to set up ; L how, where

とあって、『簡明』の◇は、Bに分類されている。一方、『字典』が“安”に付したLは、まさに文言の用法（反語＝どうして、どこに）である。

ところで、『簡明』では、“安”の(3)(4)の例として、上のような成語、慣用句しかあげていないが、実際には、その意味をもつ複合語が存在する。たとえば、(3)には、

安身 安逸 安睡 安眠 安息 偷安 请安

のような複合語が存在するし、(4)にも、

安危 安康 保安 平安 治安

などが存在する。この点では『字典』がこの意味をBとしたのは適当であった。

ともあれ、『簡明』のいう◇は複合語の造語成分としても、成語、慣用句の中でも、またど

ちらの場合でも使われるということである。

これは要するに現代中国語における、形態素の意味の存在条件がどこにあるかということでもある。

成語や慣用句というのは、結びつきが固定したものである。だとしたら、複合語と本質的には同じ質のものと言えるだろう。

、ただ、どれだけの複合語をつくっているか、どれだけの慣用句の中に使われているかは、その形態素の意味を現代人が意識するてがかりにはなる。たとえば、“已”についてみると、『字典』では、

已 B already L to cease

となっていて、「すでに」の方はBだが、「やむ、終わる」の方はLに分類されている。たしかに前者は、

已经 业已 早已 久已

など複合語の構成成分として現代語でも使うし、あとで述べるように書面語としては、あらたまった文章でそのまま単独で使うことが可能だ。しかし、後者の意味は、単独で使うのは文言的用法で、これは書面語とは一線を画すべきものである。

一方、後者の「やむ」の方の意味は、語源を詮索すれば、せいぜい“而已”の中にあると言えるだけである。しかし、「すでに」ほど多くの複合語を作っているわけでもない。したがって、その意味もあまりはっきり意識されてはいないだろう。「やむ」方の意味の“已”は、むしろ、

万不得已（不得已）

有加无已

诛求无已

のような成語の中に生きている。（もっとも、これも“不得已”“无已”ひとまとまりで意味が理解されている可能性はある）しかし、ここまでの成語に熟知していなければ、現代語における“已”は、「すでに」の意味はいくつものケースを通しはっきりしているが、「やむ」の方は、成語があるとは言え、かなり文言に近いものである。ちなみに、『簡明』は“已”の単独用法を副詞とし、「やむ」方は意味を表示していない。『用法』は、「すでに」の方は副詞、「やむ」の方は〈書（面語）〉として処理している。“已”の「やむ」の方の意味は現代語としては、せいぜい“而已”のなかに生きているだけで、書面語としてもほとんど使わないとしたら、むしろ『簡明』のように処理すべきではないだろうか。どちらにせよ、形態素の意味の明確さは、複合語を含め、どれだけ多くの成語、慣用句に用いられているか（異なり）、それらの語がどれだけ使われているか（延べ）等にかかっている。また、辞書によって書面語と文言の認定に違いがあることもわかる。もう一つ例をあげれば、

“必”に対し、『簡明』は副詞とするが、『用法』は〈書〉とあって、それぞれ、つぎのよう

な例をあげる。

我三点必到（『簡明』）

有法必依。执法必严，为法必究（『用法』）

“必”は現代口語としては“一定”とでもいうべきものであって、これはやはり『用法』のように、〈書〉としたほうが適當ではないだろうか。

5 書面語と文言成分

書面語や文言的用法といっても、字のすべての意味について言えるわけではなく、多義の場合には、その中のひとつひとつの意味を調べてみる必要がある。たとえば、“拟”について『簡明』をみれば、

拟（动）(1)拟稿／拟了个发言稿(2)〈书〉我拟于月底返京

の、(1)は語。ただし、これは制約があつて、ほとんど“拟稿”という組み合わせの中でしか使われない。これに対し、(2)の「～するつもり」は書面語の用法である。この二つは区別しておかなければならない。ただ、“忆”の、

忆故人 忆从前

は書面語としての用法で、

忆苦思甜

は成語の中で使われたものであるが、この場合には両者の意味はつながっている。

“为”の用法のうち、

敢做敢为／有所作为

の「行く、する」の意味に『簡明』は◇の印を付す。しかし、

拜内行为师（専門家を師とする）

选他为代表（彼を代表に選ぶ）

の“为”（～になる）は、用法が限定されているとはいえ、現代語における語としての用法である。さらに『簡明』では語あつかいになっているが、

长江为中国第一大河

の“为”（～である）は書面語の用法とみなすべきものである。

もうすこし検討を続けよう。

“乎”は、『簡明』になく、『用法』に、

不亦乐乎

とある“乎”は文言成分とすべきものである。これに対し、

合乎手续 出乎意料

は現代語の複合語の構成成分、成語に使われたもので質が違う。

“者”の、

作者 唯物论者

は現代語の語構成レベルの問題であるから、当然現代語辞典があつかうべきものであるが、
陈胜者，阳城人也（陳勝は陽城の人である）

の“者”は、文言成分であるから、本来現代語辞典としては必要のないものである。また、

“其”の、

他长得酷似其父（彼は彼の父によく似ている）

は、書面語としての用法。

各显其能／物尽其用／自食其力／莫名其妙／神乎其神

は成語の中での用法。

其他 其实 其次 极其 其中

は複合語の造語成分としての用法。

尔其勉之（汝ががんばりなされ）

は文言成分としての用法として、それぞれ区別すべきものである。そして、現代語辞典としては、最後の文言的用法は除外していいだろう。

もうひとつ例をあげよう。“尚”の、

崇尚 尚且

は複合語レベル。

礼尚往来

は成語であるが、ここでは意味が「尊重する」であって、うえの「なお」とは異なっている。

また以下の成語の“尚”は「なお」の方である。

唯时尚早

尚待研究

6 まとめ

さて、こうしてみると、中国語の“語素”を見る場合には、つぎのようなものに分けてみなくてはならない。

- (1) 語になるもの、口語で自由に運用できるもの
- (2) 複合語の造語成分として使われるもの
- (3) 四字成語の成分として使われるもの
- (4) 慣用句の中で使われるもの

以上のうち、(2)～(4)は本質的には同じで、現代語において、語とまらない形態素が意味を保証される存在条件でもある。

このほか、分けて考えなくてはならないのは、

- (5) 書面語として使われるもの
- (6) 文言成分

である。現代語辞典としては、(6)の文言成分は省略することも可能だ。また、これまでみてきたように、一つの字のいくつかの意味がいくつものレベルにまたがって使われることもある。現代中国語辞典としては、そういうことも細かく分類して記述する必要がある。

注

- 1) ただし、『岩波』は当時の文法観から、品詞には助動詞を設けず、これを動詞と副詞にしているとか、形容詞のいくつかの用法を動詞や副詞にいれるとか、他の辞書と大いに異なるところがある。
- 2) もっとも、『小学館中日』初版は訳語で品詞がわかるようにしただけである。再版では虚詞に品詞をつけているが、他はもとのままである。これはその親辞書である『現代漢語詞典』が品詞表示に慎重な態度をとっているのに習ったものであろう。
- 3) この辞書はのち1985年に漢日版も出るが、処理が異なり、◇を*で表す。漢日版において◇は用例を示す)
- 4) 『用法』はその序文で、「一万あまりの字を語になるかどうか判定することはたいへんなことで、ここでは語の判定をゆるやかなものとした」と明言している。

参考文献

呂淑湘1979『漢語語法分析問題』商務印書館